

ヨットで単独「最高齢・最多」世界一周を達成
齊藤 実さんを迎え

植村直己冒険賞授賞式・記念講演会

「孤闘 Fighting Alone ～地球8周の外洋航海～」



▲8度目の世界一周を達成し、船上で笑顔を見せる齊藤さん(2011年9月)【写真提供：月刊KAZI】



▲中貝市長(右)から記念メダルを受け取り、記念撮影に応じる齊藤さん

6月2日、日高文化体育館に2011「植村直己冒険賞」受賞者の齊藤 実さん(78歳・東京都在住)を迎え、16回目となる授賞式を開催しました。

齊藤さんは、39歳からヨットを始め、57歳で初めて世界一周を達成しました。2008年、「チャレンジ8」と名付けた8度目のヨット単独世界一周(無寄港西回り)に74歳で挑戦。途中、艇体のトラブルや自身の事故などで寄港を余儀なくされましたが、豊富な知識と経験、度胸、そして強い精神力により3年を掛けた西回り単独世界一周を達成しました。

当日、選考委員の椎名 誠さんの選考評に引き続き、中貝市長から盾とメダルを受けた齊藤さんは「日本の国で大きな表彰を受けたのはこれが初めて。本当にありがとうございました」と受賞の喜びを語りました。

式の後、「孤闘 Fighting Alone ～地球8周の外洋航海～」と題した記念講演が行われ、約750人の観衆を前に、世界の大海原にたった1人で挑み続けた航海の様子を、容赦なく襲い掛かる過酷な気象条件や海賊襲撃など数々のエピソードを交えながら話しました。最後は「若い世代には、夢を持ち続けることを絶対に忘れてほしくない」と締めくくりました。

終了後には、植村直己さんの出身地区の国府地区公民館に会場を移動し、「受賞者を囲む会」が開催されました。地元有志や植村さんの同級生など約100人が、心のこもった手料理で齊藤さんをもてなし、授賞式では聞くことができなかつた話や植村直己さんの思い出話などで大いに盛り上がりました。

《問合せ》植村直己冒険館 ☎44-1515



▲選考委員の椎名さんは「齊藤さんの驚くべき点は、過酷な西回りで世界一周を達成したこと。忍耐力、勇気、知識など総合的な力がないとできない快挙。そのことで若い世代を鼓舞してくれるだろう」と選考評を述べた



▲オープニングでは、府中小学校3年生の児童が植村直己さんをテーマに『ひろげよう!ぼくらの夢を』と題し、歌などを披露した

講演要旨

『孤闘 Fighting Alone』 『地球8周の外洋航海』



▲記念講演会でヨット航海の足跡を振り返る齋藤さん

■山から海へ

14歳の時、丹沢山塊(神奈川県)の一つ鍋割山(1272メートル)を登ったのがきっかけで山登りを始めました。それから山の魅力に取りつかれ、20年間、スリルを求め沢登りや岩登りばかりしていました。後に、近所の方の勧めがきっかけでヨットを始めました。モーターボートも勧められましたが、何の努力も必要としないことを嫌い、自分の力で、そして足腰のバランスで操るヨットというスポーツにのめり込むようになりました。

■世界一周への挑戦

50歳で仕事を辞め、残りの人生をヨットでの世界一周にささげると決めました。その

技術を身に付けるため、1986年にメルボルン(オーストラリア)から大阪までのヨットレース(ダブルハンド=2人乗り)に出場しました。

1988年にはオーストラリア一周レースに出場しましたが、北東部のダウイン沿岸で心臓発作を起こしリタイアしました。その際、レース出場を勧めたオーストラリア人から「お前は遊びのヨットをやれ」と言われ、大変悔しい思いをしました。

その後、幾度ものレースに出場しているうちに、友人から世界一周レースに出てみないかと誘われました。とんでもないと思いましたが、やることを決意し、1990年に単独世界一周レースの出場資格を獲得しました。

■ギネス記録を達成

1990年から2001年に掛け世界一周を6回達成しました。しかし、無寄港での世界一周をしてなかったため、2004年にチャレンジしました。無寄港世界一周を世界最高齢(71歳)で達成することができ、ギネス記録に認定されました。続いて2008

年には、74歳で西回り無寄港にチャレンジしました。艇体トラブルによる修理などで無寄港はかかないませんでした。77歳の最高齢で世界一周を達成し、最多8度目と合わせ、自身が持つ世界記録を塗り替えました。

■世界の海は危険だが

世界の海には海賊が横行しています。私もエクアドル沖で海賊に襲われそうになりましたが、とっさの判断で逃げ切り助かりました。世界の海は非常に危険な状況になっていますが、欧米の20〜30代の若者は、危険を覚悟でヨットレースに出場します。ところが、日本のヨット界は、悲しいかなそんな危険なレースに出て行こうとしません。皆さんの中から世界のヨットレースに出場する方が現れることを期待しています。

■海の冒険は続いている

今は、ヨットでも100日前後で世界一周ができます。現在、長さ約8メートルの手作りボートで世界一周に挑んでいる女性があります。今、日本はオリンピッククに夢中です、世界ではそんな大きなチャ

レンジをしている方がいることも知っておいてほしいです。

■親友との交信

「チャレンジ8」では、当初、日本に帰れないと思っただけに、それを成功に導いたのは、航海中、常に東京と交信ができたことです。イリディウムホーン(出力1000ワットの無線機)を使って、毎日午前8時と午後8時の2回、東京と交信しました。事務局のハンター・ブルムフィールドさんが3年間、毎日欠かさず交信を続けてくれました。安否確認や、艇体トラブル発生時の修理の手配をしてくれました。この交信がなかったら成功していませんでした。彼には非常に感謝しています。



▲「チャレンジ8」を終え横浜港に帰港した愛艇「酒呑童子Ⅲ」(2011年9月)
【写真提供:月刊KAZI】

■生きて帰ってみせる

「俺は絶対に死なない。生きて帰ってみせる」。これだけは忘れませんでした。誰だってやればできる。人は一生勉強と苦勞の連続です。そして常に身体を動かし続けなければいけません。そうすればどんな病気にかかっても、鍛え上げた身体が治してくれます。「慌てるな。ゆっくりやっても間に合うよ」。何事も慌ててやると失敗します。ヨットでも慌てて操船すると機材を壊したり、セール(帆)を破つたりします。急がなくても十分間に合います。パニックに陥らない精神力を身に付けてほしいです。そうすれば、大きな災害に見舞われても、慌てず行動ができるはずですよ。

■夢を忘れずに

「天は自ら助くる者を助く」ということわざがあります。一生懸命やっていたら必ず天は助けてくれます。そして常に夢を持ち続けることを忘れないでください。夢を持つことは、その人の目をきれいにしてくれます。苦しみは通り過ぎてしまえば忘れられます。応化するんです。素晴らしきかな、わが人生!